

「話し合う」力の向上をめざす国語科学習指導

一場の工夫を生かしたグループ学習を通して―

専門研究員 関根泰三 (川崎市立川崎高等学校)

I 主題設定の理由

高校での「話し合う」学習の授業において、「話す」側は、「時間が短く」、「内容も乏しく」、「うつむきがち」で行う生徒が多い。「聞く」側もともすれば聞き流している。そうした場面をよく見る。

一方、中央教育審議会の答申(平成20年1月)においては、「実社会において生きて働く国語の能力」と「進んで表現する意欲」を「はぐくむようにする」と示されており、「話し合う」学習に対する重要性は増してきている。

それでは、市立高等学校の生徒は、「話し合う」学習に対して、どのような意識を持っているのであろうか。今年度(平成21年度)川崎市立A高等学校に入学した生徒、1学年(236名)を対象とした国語学習に関するアンケートを実施した。その結果、「話し合う」学習は、学習内容でも、国語科単元でも興味がなく、関心が低いという傾向にあることがわかった。そこで、生徒たちになぜ「話し合う」学習に興味を示さないのか理由を聞いたところ、「話すとき、緊張感や不安感があつて話しづらい。」という意見が多く出された。このようなことから、生徒の「話す」場面における緊張感・不安感や苦手意識を取り去るの必要があり、授業の中で「話し合う」場の工夫をすればその力の向上が図られるであろうと考えた。

そしてまず、緊張感を減らし、関心や動機付けを高めるといった情意的な側面において工夫を行うことで、比較的取り組みやすい「話し合う」学習を行い、「話す」学習に慣れることができれば、「話し合う」力やひいては「話す」力の向上に結びつけられるのではないかと考えた。

次に、「話し合う」学習に際して、「どのように話し合うのか」という技能的な工夫を生かすことができれば、「話し合う」技能が高まり、学習への関心がより高まるのではないかと考えた。

これらを踏まえて、研究の主題を次のように設定した。

「話し合う」力の向上をめざす国語科学習指導

II 研究の内容

1 場の工夫としての具体的な手だて

場の工夫については、場というのを物理的な要素だけでなく、対人感覚や話題など話し手や聞き手の情意面やそこでの方法という技能的な面も含める広いものと考えた。そして、手だてを①情意的な側面を高める手だて、②技能的な側面を高める手だてと2つの側面において整理した。

①情意的な側面を高める手だて	☆「一方向だけの意思伝達に止まらない、双方向による相互理解」
	☆「時事問題等の身近な問題の提起による問題意識の喚起」
	★「グループ編成」「題材」「実施回数」「生徒の感想」
②技能的な側面を高める手だて	☆「主題学習から、表現への導きの工夫」
	★「観察・評価者の設定」「評価シート」

注 ☆授業の主題としての手立て ★技術的な手立て

2 学習指導の対象とする生徒と指導内容

対象生徒：川崎市立 A 高等学校 1 学年 3 クラス (A 組・39 名、B 組・32 名、C 組・31 名)

指導内容：科目名「国語総合」(3 単位)

3 指導計画と具体的な検証授業の内容

4 月：予備調査、プレ検証授業 6 月：第 1 回検証授業 9 月：第 2～4 回検証授業 10 月：学習の調査

(1) 第 1 回検証授業

科目「国語総合」	場の工夫	
	① 情意的側面	② 技能的側面
単元 小説「羅生門」 「下人の生き方の変化」と いった主題の読解について 討論、発表する。	「グループ編成」→意見を 述べやすい少人数とする。 「生徒の感想」→達成感や 成就感を持たせる学習活動 をする。	「主題学習から、表現への導きの工夫」→主題 から「生きるためなら悪いことをしても仕方が ない」という下人の生き方の是非について討 論・観察・評価者に分かれ、話し合い学習をす る。「観察・評価者の設定」「評価シート」

学習指導案

	学習内容	生徒の活動	指導者の支援・留意点・評価
導 入	前回の概略と 本時目標確認	ワークシートを見ながら、前回の授 業を確認する。	本授業で、どんな力をつけるのか具体的な 説明をしながら生徒の動機付けをする。
展 開	内容確認 グループ内で 評価発表 グループ内で の討論 グループ代表 による発表	① 下人に対する評価の確認を行う。 ② 下人に対する評価を各自、グルー プ内で発表(観察者の評価)する。 ③ 「下人の生き方」についてお互い に話し合いをする。(同上) ④ グループでの討論を全体に代表 が報告(発表者以外は評価)する。	前時での内容が書かれているか確認する。 ②～④では、以下について確認する。 ・自分の意見を論拠に基づき話している。 ・他者の意見に耳を傾けながら話している。 ・討論された内容がまとまって報告されて いる。もしくは、まとまらなくても理由が はっきりしている。
ま と め	まとめと講評 次回の説明	講評を聞きながら、ワークシートに 振り返った内容を記入する。	良かった点などを挙げ、講評・アドバイ スし、改善点などを書くよう助言する。

(2) 第 2 回～第 4 回検証授業

科目「国語総合」	場の工夫	
	① 情意的側面	② 技能的側面
単元 第 2 回 「国語表現(スピーチ)」 「夏休みの思い出」につ いて作文を書き、スピー チし、質疑応答をする。	「双方向による相互理解」→スピーチをし、他の 生徒が聞いて、疑問に思った点やもう少し深く聞 きたい点について質問をし、話す側はそれに対し て応答することで緊張感を減らす。 「題材」→豊かな体験を伴うと推測される「夏休 み」とする。	「質疑応答」 →聞き手の質問に応答する。 「観察・評価者の設定」→技 能の意識化を行う。 「評価シート」→「話し方」 の評価をする。
第 3 回 評論「水の東西」 評論を読解し主題であ る「東西文化の比較」に ついて討論、発表する。	「グループ編成」→意見を述べ やすい少人数とする。 「生徒の感想」→達成感や成就 感を持たせる学習活動をする。 「題材」→日本を見直してみ ることを目的に「日本の身近な部 分での東西文化の比較」を行う。	「主題学習から、表現への導きの工夫」→主 題から「日本における身近な部分での東西文 化」の比較というテーマについて、グルー プで相互に評価をし、「話し合い」の技能を高 める。「観察・評価者の設定」→技能の意識 化をする。「評価シート」→「話し合い方」 の相互評価をする。

<p>第4回 「国語表現（話し合い）」 「電車内のマナー」とい う記事を読み、マナーに ついて討論、発表する。</p>	<p>「題材」→身近な時事問題等で討論への関心・意欲を高 める。異なる意見をどうかみ合わせるかに注意しながら 討論をする。「グループ編成」→親しみやすい少人数と する。「生徒の感想」→達成感や成就感を持たせる学習 活動をする。</p>	<p>「観察・評価者の設 定」→技能の意識化を 行う。「評価シート」 →「話し合い方」の自 己評価をする。</p>
---	---	---

4 検証授業の結果

(1) 個別の授業についての概要

第1回	「話し合い」の学習は、各クラス各班の取組は、当初班によっては、会話がなかなか進まない班もあった。しかし次第に全体として「話し合い」が進んでいった。
第2回	初めに「夏休みの思い出」の作文を基に「スピーチ」を棒読みそれぞれ話していた。その後、グループ内で質問をし、答えを出していくうちに作文の内容にふくらみが出てきた。
第3回	三回目の議題の内容は評論で議論の背景に比較文化といったやや難しい課題が含まれていたこともあったが、明確だったこともあり、比較的「話し合い」学習はやりやすかったようだ。
第4回	内容的に時事的で高校生の関心のあるテーマだったために、ワークシートに自分の意見を書かせる段階から生徒は意欲的だった。電車内の化粧に関しては厳しい意見が多かったが、一部反対意見として「やむを得ない」と弁護論もあった。

(2) 評価シート・生徒の評価・感想

評価シートは、「話す」→「話し合う」→「話す」といった一連の流れの後にまとめとして書いてもらったが、生徒の取組は普段の講義型の授業に比べてよかった。相互評価ないし自己評価は、情意的側面と技能的側面の二点について規定する。まず情意的側面としては良かった点を指摘し、話し手を認めることで話し手の「話す」力を高めることを目的とした。技能的側面としては評価者（被評価者）が技能的な評価を意識することにより、技能を意識化し向上することを目的とした。

生徒の評価を見ると、以下のようなアドバイスや感想が述べられていた。

[生徒による自己・相互評価の具体例]

検証授業 評価内容	技能的な側面	
	良かった点	改善点
第1回 話し方の 相互評価	「大きい声でよかった。」 「わかりやすい話し方だった。」 「重要なところは、しっかり言っていた。」	「声が小さくて聞こえづらい。」
第2・3回 話し合いの 相互評価	「内容が明確だった。」	「もうちょっと元気に。」 「話し方が早い。」 「相手の顔を見て話した方が良い。」
第4回 話し方・聞き 方・話し合い の自己評価	「はっきり言えた。」 「集中して聞くことができた。」 「大変だったが全体的に皆で意見を言い合うことができて楽しかった。」 「聞くのもみんな顔みて聞いていたし、聞いた後プリントに書くのにどうやってまとめて書くかも話し合って書けたので良かったと思います。」	「どこを向いているのか自分でもわからなかった。」 「内容をまとめて話せなかった。」 「相手の話を聞きながらメモを取るの難しい。」 「いろいろ考えて自分の考えがまとまらないのがつらい。」

(3) アンケートの結果…4月当初のアンケートと10月のアンケートとの比較

4月当初、「話す」「話し合う」学習に取り組む前の川崎市立A高等学校1年を対象としたアンケート調査を実施した。そして、第1回～第4回の検証授業後にも実施（対象：同校1年生徒 102名）し、4月のものと比較分析を行った。

① 学習内容、国語科単元への関心

学習内容への関心は、「読む」学習に比べ、「話す」・「話し合う」学習への関心が4月は低かったが、10月ではどちらも増加した。「話す」学習は、10月の「好きだ」という回答は4月の約

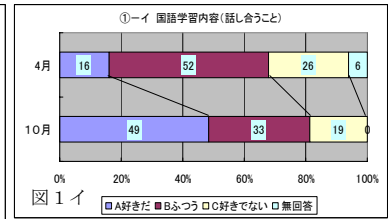
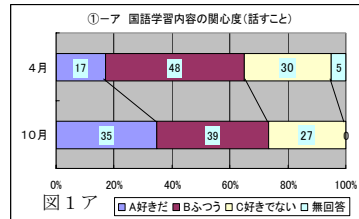


図1「国語学習内容」関心度の変化 グラフ

2倍である。「話し合う」学習は、10月の「好きだ」という回答は4月の3倍近くにもなった。(図1)

生徒感想より	○普段の授業は一人でノートを書いて話しを聞いているだけなので、やる気がなくなったりしたけど、話し合いはみんなでやるのですごく楽しいし、やる気ができるし、みんなの意見も聞けるのでよかった。(第1回) ○自分は話し合いでは話し合いの良さがあり、「読む」「書く」とは違う良さがあると思いました。(第2回) ○今後も話し合い学習でみんなの意見をきいていきたい。(第4回)
--------	---

国語科単元への関心も、4月当初のアンケートでは、「小説」への関心の高さに比べ、「国語表現・スピーチ」や「国語表現・話し合い」については、低かった。10月の調査では「スピーチ」や「話し合

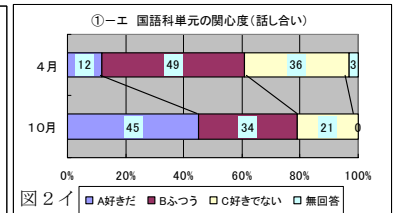
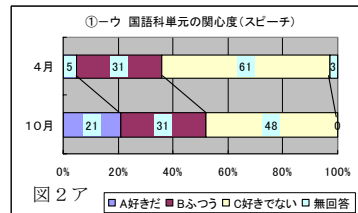


図2「国語科単元」関心度の変化 グラフ

い」の単元は、「好きだ」が4月に比べて大幅に増加した。(図2)

② 「学習内容」「国語科単元」の順位付け(図3)

国語に関する「学習内容について興味のある順に順位付けをする」アンケートについては「1位」とする学習は4月の調査では「読む」・「書く」に比べ「話す」・「話し

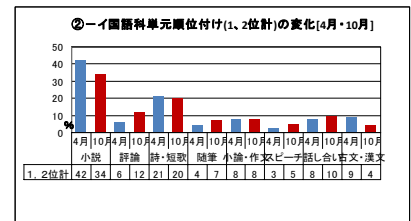
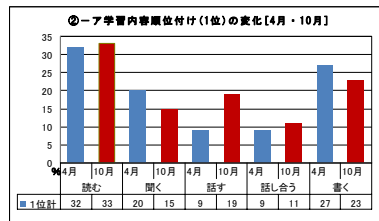


図3「学習内容」「国語科単元」順位付けグラフ

合う」は関心が非常に低かった。ところが10月では「話す」

は10ポイントアップした。「話し合う」についても増加が見られた。一方、「1、2位」とする「国語科単元」を見ると「国語表現・スピーチ」も、「国語表現・話し合い」も微増ではあるが上がっていた。

(4) アンケートの結果…「話す」「話し合う」学習に対する意識の調査(10月実施)

① 「全体を通しての学習への意識」(図4)

「全体を通しての学習への意識」として『読解の授業の後、話し合いをするのとならないのを比較して』については、「理解の深まり」「主体的な取組」「授業の充実」「授業の楽しさ」が向上したかどうかの事項に関して質問した。

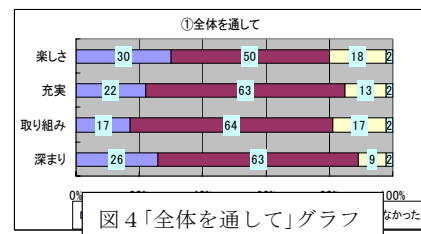


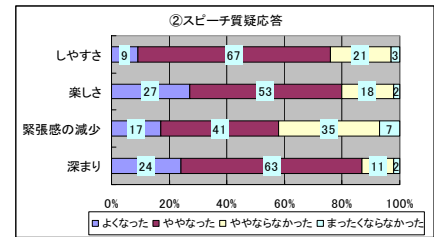
図4「全体を通して」グラフ

生徒感想より	○人によっては色々な意見があり、話を聞いている中でこういう考えもあるんだとかこの意見いいなと思うことがあった。(1回) (理解の深まり) ○いつもの授業と違い、みんなの意見が聞くことができ楽しかった。もっと自分の意見が言えるようにしたい。(1回) (楽しさ・主体的な取組) ○自分の意見は考えすぎてまとまらなかったが、話し合うことで自分にとって為になった。(1回) (授業の充実) ○いつもの授業と違い、みんなの意見が聞くことができ楽しかった。もっと自分の意見が言えるようにしたい。(1回) (楽しさ・主体的な取組) ○普段よりも議題が明確だったのでまとまりやすかった。(3回) (理解の深まり)
--------	--

② 「スピーチ質疑応答」(図5)

2回目の検証授業に関する『スピーチをした後に聞く側が質問をし、それに応答をする』工夫の評価については、「スピーチのしやすさ」「授業の楽しさ」「緊張感の減少」「理解の深まり」について質問した。

図5「質疑応答」グラフ



生徒感想より	○以前と比べスピーチがしやすかった。(スピーチのしやすさ) ○メモを取っておいて良かった。(理解の深まり) ○聞く態度が良かった。(理解の深まり) ○みんなの夏休みの様子がわかって面白かったです。(理解の深まり・楽しさ) ○皆内容が充実していて、ポイントが押さえられ分かりやすくまた、聞きやすく良かったと思います。(理解の深まり) ○皆話す人がリラックスしていたようでした。(緊張感の減少)
--------	---

③ 「技能の向上」(図6)

「話し合い方」、「話し方」、「聞き方」の技能が学習する以前と比べて向上したかどうかを質問した。

①～③について、一つをのぞく全項目について「よくなった」「ややなった」上位2項目の合計が70～80%の結果だった。(ただし「緊張後の減少」だけは60%である。)

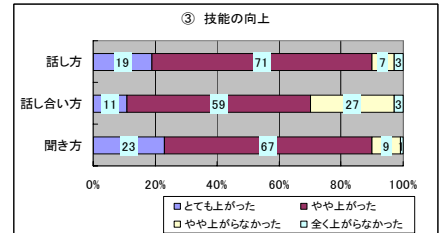


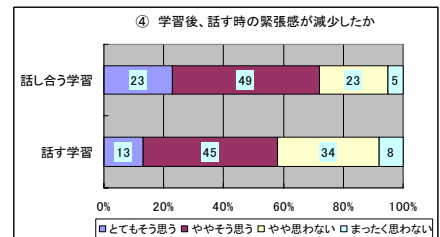
図6「技能の向上」グラフ

生徒感想より	○意見にバラツキがあるのでまとめるのが大変だった。(1回) ○今回のテーマは話し合いが前よりやりやすく、スムーズにできてよかった。(4回) ○意見が分かれたので一人一人がその理由を述べていった。その点が以前に比べ話し合い方が少し変わったのかなと思いました。(4回)
--------	--

④ 「学習後の緊張感の減少」の調査(図7)

検証授業を通じて、学習する以前と比べて緊張感が減少したかという質問に対して、「話し合う」学習の場合、上位2項目の合計が約70%になった。一方「話す」学習は、約60%となった。いずれも、緊張感は大幅に減っている。

図7「緊張感の減少」グラフ



生徒感想より	○普段話さない人同士がしゃべって楽しかったです。(1回) ○私は人見知りが激しいので最初は一つ意見を言うのも緊張していましたが今は少ししか緊張しないので意見もたくさん言えました。(4回)
--------	---

III 研究の結果

1 「場の工夫」による話し合う力の向上について

(1) 情意的側面の手だて	「一方向だけの意思伝達に止まらない、双方向による相互理解」 いつもはさらっと終わって何となく盛り上がらない「話す」学習に活気が生まれたようだ。第二回の検証授業でも、いつもの「スピーチ」の授業とは違う交流の雰囲気が出ていた。
	スピーチ(質疑応答)のやりとり『部活動の思い出』(女子バレー部の3泊4日の校内合宿) 質問「楽しかったか?」→回答「実際辛かった。」「具体的に何が?」→「たくさん走ったこと。」「それで泣いたこと。でも先生が慰めてくれた。」「嬉しかったことは?」→「差し入れもらった。」「結局終われば疲れたけれど楽しい思い出だった。」
	「時事問題等の身近な問題の提起による問題意識の喚起」 生徒の関心が今どこにあるのかを考えた上で問題を設定すれば非常に興味、意欲が高まるということがわかった。第四回検証授業に対する生徒の評価や感想からもわかる。
	「仮説① 情動的な側面で工夫を行えば、緊張感が減り、「話し合う」力の向上が図られるだろう。」 →この仮説について「学習後の緊張感の減少」などアンケート結果や授業による観察に見られるように緊張感が減少したと言え、仮説は一定の立証がなされたといえる。「全体を通しての学習への意識」でも学習への関心や動機付け

	が高まったことがわかる。小グループの実施や実施回数の繰り返しも有効と考えられる。さらに、授業後の感想からも「楽しかった。」「考えさせられた。」「新たな発見があった。」など好意的な意見が多く見られた。また、「題材が身近なものだったため、意見が多く出され全体的に討論が深まった。」などの回答が寄せられ、題材などの工夫によって討論が深まることが推察された。
(2) 技能的 側面の 手だて	<p>「主題学習から、表現への導きの工夫」</p> <p>教科書による単元学習を終えた後に、生徒達が単元に対する関心が高まっている状態で行ったので「話し合い」学習への移行はスムーズに行うことができたのではないと思われる。</p> <p>仮説② 技能的な側面で工夫を行えば、「話し合う」技能が向上し、「話し合う」力の向上が図られるだろう。</p> <p>→この仮説についても「技能の向上」などアンケートや評価の結果、また授業による観察などに見られるように「話し合う」技能が向上したと言え、仮説は一定の立証がなされたといえる。</p>

2 今後に向けて

(1) グループ形態・教材・相互評価

1 グループは、5～6人とし、6～7グループとした。今回検証授業では、継続性が必要だと考え、グループの構成員は変更しなかった。途中変えるといった試みも必要だったかもしれない。

ワークシートは、授業の展開上スムーズに進行するための手助けになった。ただ、細かく指示すると議論そのものを誘導するきらいがあるので注意が必要であると思われる。

教科書から主題を発展させる場合や、時事問題や学校の行事や他教科など授業にとらわれず、考えた方が生徒の関心や動機付けは高まると考えられる。

評価シートは「話し合う」力を評価するために必要であり、限られた授業時間内では有効だと思われる。ただ、評価シートを行う際には、事前に、求められる「話す」力や「話し合う」力がどのようなものかということの理解が必要で、事前の学習が必要であると思われる。

(2) 長期的展望

「話す」力、「話し合う」力の細部に渡る技能の向上に関しては、より個別的なチェックや長期的（1年間だけでなく、2年ないし3年）に実施することで効果が望まれるであろうと思われる。こうした学習は単に国語科だけでなく、他の教科やLHRでも学習は可能である。様々な場面によって行えば、技能の向上はより進むと思われる。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をくださいました講師の先生方、また、校長先生を始め学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

- | | | | |
|----------|-------------------|---------|-------|
| 藤森 裕治 | 『対話的コミュニケーションの指導』 | 明治図書 | 1995年 |
| 村松 賢一 他編 | 『国語科で育てる相互交流能力』 | 明治図書 | 2002年 |
| 高木 展郎 編 | 『各教科等における言語活動の充実』 | 教育開発研究所 | 2008年 |

【指導助言者】

- | | |
|-----------------|-------|
| 川崎市総合教育センター指導主事 | 新垣 英一 |
| 川崎市総合教育センター指導主事 | 荒井 利之 |